花鳥餘情抄中 十九之廿

九曜文庫

花鳥餘情第十九　若菜上

廿　若菜上

此物語に上下をわかてる事は此巻なり
又かの抄に若菜の上を廿とかそへて下を廿
一といへりあやまりしるしを廿一としるて
は漢書の高祖記上を第一として下を第
二といへるを呂后記を第三とかくこと
礼の例もありといへり曲礼上下は
記者多之故に一巻の中に上下わかつ檀
弓上下は後人注をつくるにつゝく簡

策藝多くなるゆへ二巻あり　かなあ
上下とふてあり河海の旧説あやまれし
何やらか此上の巻ハ左大将の北方さ
かきいかのふとわ判なりもすかから
わか菜とよみ給へり下の巻ハ女三宮朱
雀院の五十の御賀あり若菜まいりてまつ
せ給へるよしみゆれハ此巻をもさきの上
の病悩により若菜のことゝあって志
ますり御賀のゐしきりあり上下
の巻あり　おなしく詞哉なり　若菜と

わかりよりて巻の名とハせられしける
卑ハ源氏の君四十より四十一歳まて
三ケ年の事をかく
女三のみや宮ところあらしまけれ
女一宮藤葉女三宮女四宮也
藤壷ときこえしハ先帝の源氏にておハし
ましけり
延喜御時承香殿女御従三位源和子を
光孝天皇の源氏と此女御の御腹に慶
子詔子斎子内親王三人おはしまし女三宮

ハこれハりおもしろかりけりや
おりさせ給ふとも
朱雀院乃脱屣ハ身尽の巻よあわ
西山なる御てらにこそ入らせ給ふへき御ま
ふんれける

新国史云仁和四年八月十七日於新造
西山御願寺行先帝周忌御斎会
今案西山なる御てらとハ仁和寺をいふて
光孝天皇乃御願として仁和年中
につくりはしめられけるよ仁和寺とそ号
せられける光孝天皇の一周忌の御斎会
をおこなハるゝ宇多天皇の
出家のゝち延喜元年十二月よ御室
を仁和寺よつくらる同四年円堂をは
くわう信頼あわなる金剛界会三
摩耶戒世云文徳平城御門天暦六
年三月よ御出家ありて四月よ仁和
寺よ遷御あり此物語の朱雀院ハ薬
平御門よりかミへてなほ上をまなふも又
これまてをよりあはせ給けるせ

うのはさしをかんと御子からりしを御出
みんとをおほしけり
宇多(ウタノミカド)御門とは御出家のゝち朱雀院(シユジヤクイン)と
申侍り 寛平(カンペイ)四年より朱雀院は處分(シヨブン)の
事あり 李部(リホウ)王記(ワウキ)よみ侍り
女御よりをんなうしきさきたりしゆるしさせ給
ふるき例をも女のむかしをもおほされさせとの
給ふなり
古院の人のおまゐりきはまり侍
こまつの御門の御事は一之[illegible]の奥にあり

ありし院とは源氏の御ことゝぞ
ちゝおほれ事のおやまちあり
朧月夜(オボロ)の事によりて源氏の君のを
すまへうつり給ひし月に
はまにてうたよみしへき中とあり
明石の姫君(ヒメ)の東宮(トウグウ)の女御なりしなり
女御ふたなり
かしこき代のおほけき君として
冷泉院(レイゼイイン)とも天暦(テンリヤク)の御門はかしこきへき
御なり

十徳の月をめぐり

十月を秋といふは紅葉を賞（しやう）じけるゆへや

又一年を春秋とふたつ夜をハ春よりり

冬をハ梅ありける故也

女かたきまさしく川かなるとわれハ

中ころの中納言女にあらんとてたまへ

のらし十二月の事也

それは道をいとふよしにてこさかるハ

多寿（きり）八十九歳なりし中納言ハ行（こ）ゝろか

をそり

左中弁なる河原院のさびしき人なりしを

六条院の院司（いにつかさ）なるをいふなりや

ありしとおもひてまつりしと

床夏（とこなつ）の言の詞とちぎりける折も今年

おもひ思ひ致てまつりしものしみを

かゝる世の心

されハ世のさる人来の世なりしかく

これも源氏の作りのちなき事なれ共

并物語もみなし

然さまらしき事かや侍らん

ゆかしき人なりともなくてもし御事
といふなり
みなかうこそあれとはしきそうそう
ほうしは万事なり洞達しならせこそ末
の世にはいかなる上臈なりとも縁有
こころうらとなりてはゝかさむる事
のあらん事をいふて
帝の御かたちえらひきこえありけれは
皇女なとのまことの男もちたまふこと
となり

ひとりのゆかりをみなかなし事と
みこたちのまことのこゝろちは縁人
なとえらひの家をわかちまし人忠
ひとかたのるいし物とき物ありなから
ちなきおやのなかくてありなとひ
まてゆけるあなかしこれよなからう
ありふくこよなくれさいくひなり
これを下よおやりまかしをしらん人
をゆかさるありんゆるしのひまうしき
公女の事ありふくこゝに記す

さいはひありなやと此事なりな御事も
あれともうつし先ふてきてさけ給る
はいんつさなくわはゆるとや
業ハ今の世ハひとくたし
よの中の人悪ハ人まくたりけり所道
を覚るハへしてよらふかくの事とい
ぬりしをよくめてすし
身はかのかりしてしく悪人ときもわすめを
三界唯一心心外無別法のことなるな
悪ハきもわしきもんをとなかくは

悪人ハ二三年わきさ御之
所為くわらかに人を殺りしやとこゆか御さ
まなかりを
これかハ廿三の歳此の事をつくわこ
きられハまう端てこく刃夷こゆ
似よ姫君ハありかしゆうしまさかとち
のとゆちのこらかしまうせくりてみしさ
こゆかさまより流ハありしゆしうち
はくまうつを思ひあり
流のゆく事をとさすてものとなきた

よくよつしき事有思ひつゝも

又大納言のおとゝのいへにさのみむかひなり

此大納言と系図なれは院乃勅別

当家よりいなりけるも女三宮乃家

司をのそむをいへり

かの孫にはるとして

二条太政大臣乃はしめ給へりしを北乃方

内侍まての母にて朧月夜内侍のことなり

婿君に

にやあらんとも思ゆ

いかなるいまめかしき事にも人の心うつりて

猶そはかはらん人をと思ひて

御もとき此事なりけれは

昌子内親王乃御もとまての例をと思ひ

又朱雀院の后女御なとも又御悦の

時なれは

念頭のうちにあり

人衣の取乃対をいひて

猶こし后のさきをと

周礼王后六服禕衣揄狄闕狄鞠衣

褘衣といへり長恨歌傳云又命戴歩揺
垂金璫明冊爲貴妃半后服用云々と
御もしゆひのおほんかみあけかうふりきこえ
させ給へり
康子内親王の御もきのもしゆひは小一
条太后の例也
裳着は大臣の御ひきいれにて也
これを大饗の例とて御もきのもし
ゆひを裳着といへりおほよそ唐朝より
八徳爵歯の三の中に一をあけて

裳着といふなり
中宮の御もきに御さうそくたてまつれるに
れのゆひたりいまの髪上の儀式なきを
しれるといふ事也
何あり昔はさまさまあれと今そのみきひとつを
さしあけて文字二の心ありて櫛をさし
ひきさしすへてゆふ事也といへり
後拾遺
をさなき人の御もきをしはへりしひと
こころさしあるはさすかにこころへさりつつと

と詞にも用ゐて　拾遺集

大空にしめゆふよりもはかなきは思ふ人のありをなりけれ

又

さるかたの浅きも海乃月をまちつゝかくれん

是はさかのふしと子詞ありと見えたりこれもしるかし

前をも今ありつゝ車いの字に二のんかり道なるべし

御息所のしるしありともれをしとこそ

斎宮の御くるまともさき朱雀院の御身

ありさまくあかしかさね車とあられ

とれしとこそとけるかり

れいのごとくしらぬ御車なりけり

西宮抄云太上皇御幸供奉人装束随時

無定上皇乗車檳榔朱雀院初令出大

内時東金銅檳榔

と業唐庇なとゝは後より出来るか之

御かゝのあめ御車なとを

女三宮の御車なりおはしまし給ひぬ也

御あれしたとれしもありけり

河海には饗乃説ある也

院の御まへりせんさうのみけんより出られ

ゐく

朝覲行幸時主上御前物ハ紫檀地盤
六本有折敷ホ浅香乃かきらん一ニ准之
又御鉢ハ依御法躰被用之鉢とハ應量
器といふなる後の崇光宇多御門
ハおなし後正月三日朝覲乃ためニ出ま
乃御門仁和寺へ行幸ありし時ハ御前
靴を撤をいはくし又年三弥しぬり又
主上つねも法皇おなしく御茶を供
せし事もあり御法躰の時乃徳なく

乃こく在俗の时乃礼よりの事のミあ
るよし也張行朱雀院出御ニ法精を
やめくハ御そとりもかり仍る寛平法
皇のせしのかくとまうてひまへらの
せられいもうとへぬくさをしてそ
我為まいらせてやぬ御なん那事の法乃ゑさまたし
伊勢女御の御子のうまれてもうとくるすあれ
しらするてくやといひしなり
菊童女御ハ式部卿宮の御妹ちかさの
のちの御とふや

あちきなき大ゐの御車ゆくさん
いきく鶴乃大ゐによそ乃声をわき
せの御車をやしきさきの声の声りの御や
うちとうこの御て
いしとくりぬ
源氏四十歳になりの御て
きさらぎ過て人て
無部の女しらせの右衛門督にて
正月廿三日子乃日なりけり玉大将の北の方
まゐれまゐりの御

延長二年正月廿五日甲子天子四十
御賀又上皇被献之於紫宸殿有其
儀采女調和若菜羹供進云々
今案延長二年御賀は醍醐の御門の御
賀也宇多御門これを献らる此物語も朱
雀の大ゐの室は朱雀院の御賀をそてまつ
る文子の例にならひそしとよは正月
の子の日の御賀の年乃御賀也若菜を調和せら
一としてつ乃事なし此物語乃例をあ
げられたるにや定て

みなもとのとほるのおほいまうちぎみ
六条院の東のおもてのひさしのまへの
てし放ちいでのことさらにあそびければ
御ぢしき四枚
地鋪は唐綺り大文ある師子のまるをつけたる
或龍鬢地鋪わり
らでんのみづしの上には[illegible]
[illegible]
仁和元年太政大臣賀夜冬衣裳袴
衣臥具屏有数とく

ゆするつきかめのをこ
油沐器　有臺并蓋うけのさらは打乱筥や
うるはしくかさりてけるにや
きんだちの御子二人のかはりに右兵衛督
右大弁とよばるゝ人あり兄は真木柱
の同胞男子とよばれて御世の人には
みな人の手本とありけるよしの
うちに蘭の小松とりつけて
よろこびのかざし此時の人の手本なりしも
うちはらひ給ふ

さとふつのえうまつりおほくわたれしと
まゐらし給のとのまゐりて
御むまこのきんぢちはひろきつかくも
大将のみこちい或のおほむまゐらせ
内とのよそへさせりもの御物よそらせ中納言とり
わたてまつりてさふ〈〉まゐりつゝものゝり

外記云延長二年正月廿八日御賀中務卿敦慶親王以下同蔵人頭朝臣執捧物惣廿捧華厳々類或花彩奏次侍従以下執折櫃物惣廿捧文物盤小籠五梅柳枝男女ホ〈自日花门列立庭中一列親王以下参議已上各奏物名訖内膳正忠良率膳部〈自日花门受捧物出〈自同門

この御ときにきやう殿の御物あまた

御記延長五年正月廿二日召保忠令吹笙曲調殊沈聴同賜橘皮笙是故太政大臣昭宣公弱冠時兼和天皇為令学習所給也寛平中以其名物所献々其後為宜陽殿笙令尋旧意以賜之
同延喜十七年四月廿二日此日返納宜陽殿累代書法此殿自本納書法百九十七巻注

年暫出着覧又於御書所摸取せ令摸写
功記返納本所只除大数并二細目觀其題
名或有誤謬仍新作目録一巻細記題
名裝束及其記謬加以置之欲後来看見
之頭有分別耳又加書法三巻足二百巻凡
厥子細具有目録即令右近少将侍衛花人
淋行ホ拾細々

あまねくの常にかはらぬつきかけに
此御抄夜景なるにあてゝそ
かゝる人をせのまへもりつまく

後

うきくもの今のせいてつに君の松やまとをつまし
むこの大君といふんりもこゑとたかく
吾妻の西の詞に
命よそ人ゝをたゆまるゝ世のつねなる世中の哭そ
いのちは人をもゆるも此里はうつろ武
うき山三十句乃いさゝちなさ世乃な
らひなりぬ哭とぞ
中道を定うつれなき社とんみちけさるあゆさ

後

うきまて家りとわか宮は地そよ人の世の利
とこまり宮

詩作ハ律伴といふて

桜かさしハえたりけりとんまろうてなやかりまし

紫の上ハ桜のさくハまさりたり利も

ありてもとらしきハかりし桜なると桜の花よ

われ思ふのみて

其上もあまさりしろ川にぬれしちと海百り

やわん花のさかりかりすてみるやと

紫上乃返答ハあまさかろうとぬれしめと

まつやわん花のかりかかへらうたると

やとん女三宮を思ふせまうかし

きハこれ第一年ハうたかなりりた利

うり人にちかひとうかけそこよれ返えとて

よその花のひそひてわかまかり帰れてなかし

とおかもたり

源氏の心より女三宮をよそてなひしとて

よ桜川わかまかり帰るよハ帰れしハ紫

上ありかりし人み経へハわりうこうされしか

りこともうちしへてうとかもう海とて

た川桜紅へ帰ゆへてやわんとて

女三宮と紫上と毎ろくのひとこりしておく

しもは事也

そむき初ニハ世をのかれんとて山道のおくにいりけれ
此世をいとひまうす詞也
おのれはそのとりたちのあるじへ入り給
ぞとなれは葉月の舞は是の木も千載よりかはりぬとも之
みえりし比ありはらこなたあれて
浄子をかそくあまたく人の身をぬれかくれり
あまくありさりしをあらんあるへし
これをとりてやとひきつこりし給
浄子を見てあらんとするなる也

ね夜にゝ入りとりさわあわわくきてたつくれとも
あれのゝ事もあかりしを
朧月夜を女郎花とりハなりけれは
あつのをいてるなる織をもあれ
尽うくゆしありゆくれり
あさ日の事也
むかしのあつしきすかたのひんしおかくれり
西乃對の東面也
我より上の人やいあるへき
紫のへらの御ありまへの事をのするなり

東宮御さいしちうのゆゑ〳〵ありしを

あしたのひろき東宮の女御なかたちの中

なりけるゆかり母女御とよりさいかはし思

おやまへゆかりや

よむことの心ちとそきこえいはしきりにくらさん

のつきよくなりけり

承平七年十二月廿七日陽成院御賀正

殿西放出南三間立螺鈿倚子

今案紫上御賀ハ二条院にておこなはれく

からしみえたり

おとゝのおほむ御ちからにてえ十二そく

あなうたもの御よそひ物をみなとゝのへ給

ところせきさまのおやのおもひなりと

承平七年十二月十七日陽成院諸親王

源氏為太政大臣御賀西南一間立御

衣机八前　以絹置御服筥八合各有

黒紫綾覆

清涼院記御賀宴延喜十六年儲平敷

御座云々　机五脚納夏冬御衣五脚積雑

帛各五十疋

承平四年三月廿六日於常寧殿有中宮
御賀帳臺東辺立三尺御厨子六基
衣筥十二合一基
衣御衣五具冬五具
この比なとはつゝちんのくゑそくたいまのこれ
ちうの孫のあしねうらんとへおと
嘉祥三年仁明天皇四十御賀以擬頭臺造
沈香山以金鳥銜鶴含御挿頭花
ひろしの時なりかく入つきんさつを
まうちのやうなとまいつく
延喜六年十一月十日御賀先奏一万歳

和次薫合香次皇歴章
ゆふさくら井はなをみく
むかしは紅葉の賀の時は源氏中将
位のおとゝは頭中将にて舞つかまつり
ておとのつとのり秀は権中納言にて
木へ来つ諸うちとりて
きてうのまん木の別當とも
ゆうさちのくは家司之女房とはかのき
又かの政不事と入りていひくさけ
さきはくはたゝき源氏の政家はかゝしく女

又北政所といへるは事あらんや
中宮まして世にたくしられたる御伴
のりありての糸の七大寺にみを行ひの四
子皇このもちきこやこれ四十あまり寿の百や
とちちくをさせの〳〵
延長二年の天子四十等布千段十三大
寺に諷誦を修せらる
兼平四年三月中宮御賀七大寺東
西延暦極楽寺等有御誦経其布施東
大興福大安薬師延暦寺各五百端西
大法隆東西極楽寺各四百端奉為
中宮息災延命也
四十九賀といふ事ハいはれなくもあり侍りしにや
のよろこはしきことを思ひなんとかたりけるを
昭宣公ハ貞観十七年四十賀ありて五十
七にて薨ず貞信公ハ延喜十九年四十賀
ありて七十歳まで薨せさる例をわ
出とめかりつきてためしとするなれとい
ふなり
文のかろしきにはまちのちんなり

中宮にはおはしまさねは親王しけるにも
との御かたの宮を修理せられて六条院
へうつりこもり給ふ御事に
かんたちめのつとめ大饗ありけるとかや
正月二日二宮大饗事 西宮記云 大納
言白大褂二領 中納言同色一領 参議紅大
褂一領 非参議四位柳色合小褂一領 五位
細長一連云々 延喜中宮式云 親王以下大
納言已上各白褂衣二領 中納言三位参議白
褂衣一領 非参議三位并四位参議褂衣

一領 五位綿一連 高唱四位五位名賜之
今案此御賀にて中宮のきさいの宮より
まうけおほせ事ありしかとも歌王公に
こと下乃禄大饗の例を用らるへし名目は
かはりしも大饗のことくにはあらさるも右大
将のはれのこの御賀はさきのへの御賀
よりは禄のさまはかはれる
ゆゑはかりしをおもひえさせたるなるへしこそ
事なりき
七大寺以十寺なとへ御誦経 施功徳銭之

施入（セニウ）ありき又延長（エンチヤウ）四年六条院乃御賀よ
い朱雀（シユシヤク）の獄（ゴク）して賑給（シンキウ）の事ありいましこ
まて乃事を思ひて物たまはりにいつり河海（カイ）
よみをいれたる史記（シキ）直子（チヨクシ）なとは今いふ事
小ハよわろあかしもあて用く
うしろのまちよ御志つひまうき給く
此御賀に夕霧の右大臣花ちる所と苦
ところくうしろの御ちのさんてん
まてうけ給はるし之
所々のこゝやなるもくり川うきさしく所かん

あはれのまつ場のつゐ
内裏（ダイリ）よおほこなちろ御賀にいるなく
そくられらしくき流おくられさやう
うんしさの事といさとりてすくそなかい
ち薪人（ウラウド）はきんしとつきくてすすねさま
あるる事な例
とんちやう人きまいの内東宮院のうちそくおし
とんやう人は禁中（キンチウ）にいおりを流の前と人
東宮の殿と人おもてうちところく
みゆうされく昇殿（ショウデン）なちる事ありかわれ

ゆくゆくの中より祢らる事をおこなへし此に
南殿にてありしを大裏にて御拝せす
は殿上役よりさたすへからす也
御馬千疋あまりのむまつかさ六衛の官人
まいりつきしりひきとのふる

延長二年正月廿五日自宇多院被奉若
菜は内裏院ひきそ物ゆるる四十疋
今日於花門龍尾人　次右馬寮給之　内豎奉上宣召馬
左近退出近衛張之　以木大卜立右杖西頭
西面
仰之
今案延長の御賀の御ゆる千疋て
院よりまいらせらるにより院の御まね

ねまりにしをいふそ清よりかすまかはら
ひわすくひきまいの官人をめしてこれ
を猪く此物まりの御馬は内裏よりひきせ
らるゝりわて右馬のゆるさ六衛府の官人
寿こをとひく延喜十六年三月の法皇の
御賀ありゆる十疋内裏よりまいら
時此こと時りえてらは事によりて
さるへし

まいりのかんさいつくゝるのそんふうてはゝすむ
此外毎年とあるかあふるへかれとかくふれ

尓なかりまでこの二をめりめでたきも御
賀ありあけりわる筆なりきまし御
挽をいそふ翫りよく筆は首しきハ
ありのうしみなり
御ぞくるも物よとれしうこのきこんむちこの尺
竹にまきふえうてくきろんのちこ一にうひり
うのおとこうのさうれおなして猶く
御らまのりをひくたくもつき給
延長二年十二月廿一日中宮奉仕内裏
御賀 吏部王 一記 宴酣右大臣率一両大史自

中宮御方執樂器於又廂當御座跪大臣弁
一執小辺大臣清和御時言 元清和七合や同
獻箏春鶯囀 枝 付木 次八条中納言執琵琶 兼和御時姿之
次琴箏和琴式部卿親王向之大臣奏曰
右宮奉貞大臣譜以次称名之
兼平四年三月九日奉仕中宮御賀 貞信公記
不及禄退ハ追給禄并手跡和琴等木
万葉集入筥二合
今案延長二年の御賀の凡川かねハ中宮
より内裏へまつらせ給ふ色目を吏部王記

よそのされしかりハ生れ給へるりハ致仕乃太政
大臣より六条院よりの引出物延長の例
ハいおほしりけるとて承平四年乃中
宮の御賀ハ貞信公于時摂政にて主殿を
らる摂政ハ人にて禄を給りさまり早出
あるしハいとくて中宮より禄を給ひ
和琴万葉集乃印本をたまはりけるよしの
宮の御ハ太后の御日記にもみえたり此例
生乃枇杷殿よしハいさらにおもひきりた
侍りけりや

その日此御ちかくおとこあそびこそありけれなん
志給ひけり
花宴巻乃事也
としろめ
源氏年二十乃とし也
右の君はしき事をみづからしるし
あそび乃はじめ事て
まさにいはれなる御わけあり
明石の姫君十一歳で
くもゐのはじめのさまして

御つかひ来て奏すれはみかとの御けしきもとみ
もののうちにさる御わさしくやいと有
わきまへなれはの事も藤氏の中におほしそう
きはめくちをしくもおもはれけるなとおほす
是は殿上の入道よりかし暁のまいれは
とおほしめしてうちはもとをゆるさせ給ふを
我おもひもさけなしとおほして
きこえさせ給はれはまゐり給はんとたまひの
上達部まゐり給へり
御むすめの后の御産ありけれはのちのそれより所へ
又紫の上もおなしくまゐり給へりとき
御むつかりなりからう給へるもいとゆゝしけれ
延長四年六月二日皇后産男児 村上天皇 内奉仕
御湯大君前湯
六日といふにはれのおもてにまゐり給ひぬ
寝殿へまゐり給ふ文し
七日の夜内よりも御ふみとらのおほしのあり
延長元年七月廿日朱雀院御誕生七日
のちふ御しきひ内裏より同四年六
月一日村上院御誕生七夜のはしめまゐりなり

裏よりせうそこの例しは前の物は樸木
の小臺盤六前に銀の笥馬は盤との地
とをゆるやうさるひとりのむぬとさぬの
碁手の銭の千貫或三千貫ありてあまり
番入の人とりは女の装束以下合よ
例てこまとのふえれりみふきぬ一うさ
禄せらきこりさみとえて京之
ころもとむもんぬりんをせしうのとしの二
月のうの秋の落ちりみしもあつつすこの
山をを右の手かりの家より出あそぶよ利

月日のひうさやうりけしせそ世紀てしさらり
うらは山の下のの家ありかくれてうのゑまあり
あつまを山とはいろきうとみりうんとさらくち
いさえ舟うりのあさくおしのらとさしてこえ
ゆくとうんめんなし

過現因果経云至普光佛影名乃燈灯之出興于世
介時善慧仙人因与五百外道論議破其異見
時五百人求為弟子各以銀銭一枚上之善
慧聞佛出興今燈照王迎請供養擊唱
令國内名花皆不得買悉以輸王善恵

聞已大懊惱欲訪花所忽遇瞿夷持花七
莖畏王制令藏着瓶中善惠至誠感花踊
上追呼就買此女答言當送内宮欲以上佛
不可得也善惠告言五百銀錢雇五莖花瞿
夷問曰欲花何用善惠答言欲以獻佛瞿夷
又問獻佛何爲善惠答曰爲欲成就一切種
智度脱衆生瞿夷答言今此男子乃尓志誠
不惜錢寶即語之曰我今當以此花相与願
我生生常爲君妻善惠答曰我修梵行求無
爲道不得相許生死之縁瞿夷即言不從我

願花不可得善惠又曰汝若必定不与我花
當從汝願我好布施不逆人意若使有來從
我求乞頭目髓腦及与妻子汝莫生疑懐吾
施心瞿夷答言敬從来命今我女弱不能得
前併寄二花以獻於佛使我生生不失此願
好醜不離必置心中令佛知之時灯照王頒
諸官庶持妙香花種種供具出城迎佛王臣
礼敬獻名花已悉随地善惠見諸人衆供養
畢已諦觀如来相好之容欲滿種智度衆生
故即散五花皆住空中化成花臺後散二莖

亦上於空尓時王民龍天八部見此奇特歎
未曾有於是普光如来讃曰善哉汝以是行
過僧祇劫當得成佛号曰尺迦牟尼既授記
已佛經行處而地湿善恵即脱所着鹿皮之
衣以用布地解髪覆已佛践而度復記之曰
汝後得佛當於五濁悪世度諸天人不以為
難如汝我也是時善恵投佛出家白言世尊
我昨得此五種奇夢一者夢臥大海二者夢
枕須弥三者夢諸衆生入我身内四者夢手
執日五者夢手執月唯願世尊為我解説普
光答云夢臥海者汝在生死大海之中夢枕
須弥者出於生死夢諸衆生入身内者為彼
作皈依処夢執日者智光普照夢執月者清
涼度生令離熱悩此夢因縁是汝將来成佛
之相善恵聞已不勝踊躍　大蔵経辞字函

今案内典外典に夢をとけることおほしと
そもこの物語りにみえたる善恵仙
人の五種の奇夢をとけるよりもまさしきも
またふかくしめしたるのへきもある事
あるひは先須弥をいへは梵語には蘇迷

盧山(ロサン)唐(タウ)にハ南高山(ナウカウサン)といふ地に入る事八
万由旬(ユジユン)地(チ)を出る事八万由旬合て十六
万由旬の山なりとて高しとも愚なるや
東西南北に四別(ニウ)わかれ日月ハ山の半
腹(ブク)をめくりて晝夜(チウヤ)をてらすといへりわか
しれ入道の夢ハ明石(アカシ)上のむまれんと
そは秋の夢といへりさるくされし哉
おなしくていふ須弥(シユミ)山ハ山なりとなをく
いふなき山なり右の身の陀からといい
事ハ母を右に作らされしハおりしけと

とかなる一山の右より月日のさし
出るハ月ハ中宮(チウクウ)日ハ東宮(トウクウ)にたとふれ
ハ明石(アカシ)上の御女中宮になりて孫に東
宮を生のみ夫瑞夢(ズイム)の身つゝハ山の
ことくにめくりの光りわかれくといふ
ハ明石の入道は我の事なく栄花(エイグワ)とひき
かのみかけ逃ハ御遊とそみさるを見に
おそれぬといひけり山をそひらき流りう
人とくに東宮つかりれ依よつき始く
四海をたふこらりにきりのゆへ

まうあるいちいさ紀弟よのりてわしを得し
て行き大道般若の弟子となりし生死
の海をわたりてまいらる極楽の岸にいた
ゑかくきりたまふ現當二世の所願如説
ありそてたまふ瑞夢之善恵仙人の身
よ須弥日月を人のつかへ事は普光佛一
ところをわするるかすところの心
相違をまとしくともなくの孫にいひ
そこの不の成就を得事は出世の利益
にとなりとゆへともなきをつくしきと思へ

きこし玄奘三蔵は渡天のおよ須弥の海
中にわのを夢にみ淨と慈恩傳にあり
又夢に日月を呑とみつは如来を生と
そいへり夢は無明迷習のあるをいへとも
佛とおかく夢とかくたとへしては法と
ところ故に此つきの何にしもい
うのしたへ中に夢をとしつる
事なりとしへりとてをゆる乃
作者も善恵の夢をふまてう
きやうんはこの物語の法楼り

ひとつのせうなる事おもひつゞけし

夫尋清き山の麓をまうく
嵯峨の御代に玄賓と僧都よおかされし
時官牒を樹にかけしをすてゝ三輪を詠し
東深山に入りつゝこもると云
こゝ国ハ水草よきふしぎ事ありきなどの中にも西をまもるかな
世にへり人のうちを続けるものゝ縁も
ありしも
明石の入道ハ奇恩入無為の心にして又子
恩愛の道をたちんともかくへすり人

ゐろゐを翁の衣よりもやけおまし
きよしを遺言し侍ると釈するなれは
浄飯王の金棺をかき給ひ目蓮又母の為
とて孟蘭盆をまうけ侍るはわすれ
うゑのもろ事よわすりてそかのうつの
迷を執せん事をおもひはかんやかたし
我をは變化の物と思すせとそのとゞめ
并ハ四生の中に化生のものとて去
おさいれと人ごとに劫初の時より化
生なるはおかしとみえられ身の變化

とかく佛菩薩の願力或は神力よりて
善悪の業を或してまよふのこゝろを現
せし事あり變易生死といふこれをいふて
布袋和尚は弥勒の變化寒山拾得は
文殊普賢といふなりし明石の人丸の
變化の如くにあらはれ給ふふしきにさう
はつきありとあり
さきのあはれまことしてきこえあひみん
事をおはせ
善導大師の讃に誓到弥陀安養界還

来穢國度人天の之
あきらかなることをみるもんはあらはさんと
あはれなれは浄ちゑ
教をこつきける夜のまゝいふとつはけると
佛涅槃の時三明六通の大羅漢も挙身
毛竪遍身血現涙盈目生大苦悩と
大経にもとかれり
よ流川の事さらに爲人の御ためにして於かれ
えられし
さるへき人はおやの文をいふて

くらひ給ふ人御むすめのはらとし来りおはせん
尼上乃明石のよりこひのこすけ
いとしきの孫ことおもはしとおもふ君乃のれてまします
おらん給はなん
わか宮は東宮にたち給ひなんと尼君は
みをとてまつりやの御かた
ありしきおとこさへうらひくいつのりんゆかれそ
おほさるらん
是は東宮の御事也
御かたりわかしきこし給へるも嬉し給

めてさらのよれ東の御はりますお君とよく
しきこしのみるよしこ
女よおもしめされぬりわか君そてみもくま
ほり給ふんでそらく給つるまして御とくいうき
つもれしとゆかしさもたれし
ひめ宮もそおもしますともわかるへし
なま世給へくみてそまつせ給ふんなた
車のはつれいなんやおもこ宮くりしめ
いま御おりしませはとさ給へし御みし
ろきわかれ人来事なれはわかなき事

てみるハ梵語をいふなり仏経をくわ
わし行へとく
ましもやうなりもひくかくりまなくいひた
くし経ありしかく御きちやうをひき
御ありさまハ
もひろくいたくハ地てくをかうふるえいひ
おもしろき人をつひかくしもるなけり
源氏の御事を申しらおとき
こく行事をいふてこれハ明石のう
ろ事也

いとあはれきうんしとういふやうなる御わざ
り
梵字(ぼじ)ハ天竺(てんぢく)の文字(もじ)之十二乃摩多(マタ)三十
五の對文(タイモン)なといふ事あり筆勢(ヒツセイ)乃も
るまをそかんしのやうなるをいふ也
ねせんさ乃あるへハ
明石乃入道を大后御も思て
おほかけりけりもちりあなかれてけり地乃
あうひありてうのむくひりくもを思それ
きありなと人いふかもしをかんなこれる

よつぎもしとくいでゝ侍るなりとて申さ
れいはわすれぬも
村上院の第一の御子廣平親王は民部
卿元方のむすめの更衣のはらなれ
ば御かど冷泉院を后ばらなればとて
ましましゝかば第一の御子をさしを
きて東宮にたちたまへりしを
われはそれを思ひておもひしかく
さしかうの冷泉院御物ぐるはしう
おはせしかば御子花山院三条院と
ておはしましゝも花山院をはじめたてまつり
御位をもすてゝはなれさせ給ひし三
条院をはじめみなさまざまにおはしま
しゝか三条院の御子なりし敦明太
子と申しゝは御位のをみおはしよ
しおはせありしかどほどなく院号かうむ
らせ給ひて小一条院と申しき冷
泉院の御すゑはいまもたえずしていとど
まつり給ふは悪霊のしわざとぞみ
え侍しかく三条院の御めしひなどは祖民部卿

またとやは後朱雀院の四代に入内(ニユダイ)ありて
後三条院をまうけさせたてまつりてみか
ど陽明門院と申きさきの御はらにこそ
いまの世までつたへさせ給へ三条院の
御すゑおはしまさぬかはたえさせ給ぬれ
さらは御子孫(こそん)とのこしたまふ事は
物語りにある明石の入道の事に公私(コウシ)に
ちかひをあまたたてけるゆゑなれ
住吉にてかく志ありしつきを作りこれ無(む)
かくまてはつまかりに給ひける也の

事なれと世のことわりをゆかしつもゆま
ほかの事なる大夫とや
あやしくいふかしくもおぼえ侍りたりきこと侍さ
しあ利と
これは入道のんとして
此よし画乃世のありさまを
まことのたとへなり
こころをおしてたらうの中さえそうる人々とゆを
ならはずして人々はまはしよくしかた
れまいらくら給ひてのみ無かまし

きこりとおもひなとる事もあるなる趣し
我身ちはまうくみの身ちへ下のこゝろゆくこと
こゝはまつ母乃心ゆくと身まゝ乃を思よ
猶ともうなれとはまつみ乃こゝろなれ
ひさ免しあるまれしとはまつ母乃思ひ
なる経してもみやあるまれり思慮さ。
事也
誠りく作となれとさは許しい
此うみもまうくるもおのうしとかなれ
をいふなれ

おほくハおゝ孫と今乃この
源氏のみぬまう御さしく此事也中忘
とう心はゆへしくうちさゆへ
又おまり記うけく
叩也泥うし此巻りまあおましく初也
くる乃人ハおもひ庵もまはうし
源氏乃内ゝのとそみくへみれくと内うし此人
うハ志う拂ふ心へ
乃弱を世孫といいおりくとさ御もくしさゐと
これをおうしのよ乃内返答く

人すみし月のかけとて見しはぬと
きえぬる世なりけるへうらみて
これもみるまゝにあはれなりとあはれ
是はむかしの人のおもかけのしのひつみのしの
小事也
その御こゝろくるしく御心のうちに
女三の宮の御事や
三の宮のこゝろさきたまへり
後言（シリウコト）や源氏の御後言（ミシロコト）也
物うちのそねみもしうらみ給はぬ

あま君の我御むすめの人のうへを
いふなれ
我も人をしれぬ思をこひあかしんも又めでたく有
いとゆかしきを有
物ゆへいかならん身もうけなき人を有
うち御まへそれ給へるつねなし
御かたりみゆること
おとゝの君をとゝりかいはりくおほしめさる
て見るなり
源氏の御山こもりの事也

しんてんのひらしおりく
みしのさいの東なりくり御里のかれ
ありさわつかいふるくさりさり給へとも
い海いはを乃おほせふしてこ
のはいてこやうしくなりや
将くさまうの事なわきくれたうしきわ
うひさといふなり
御ちしのまふわさくさくてのけり
しんてむのおもむきさり浩間わるへし
おくしと云をとくのうら給へりとて御

らいひを
まわさいふ人ゆかりんおろさぬ事し有人
人々えくれと今りわくうれ事を
おほしこ
のねきのとそてはくとこうし御くみくまし
きいうり到さわ家給へり
うくひといふえくも御事こえさうしめさき
のうしとる事こ乃しねさきのうしたう
まくの乃くへりけりせ
しれ御の枝をうしめとしおほせく

資雅卿は雁の枝をとしにつけてけるにあ
らしかり是は楓の枝をなかりけるか
おりける有りや資雅卿は宇多源氏佐
木野と云蹴鞠の家也有雅はその子也
有雅は後鳥羽院の御時蹴鞠足にて
ありの次山吹の枝をさして後
枝には紙をとりてもとにはかねる
有りなるやうくこれのつまのもとにけ
に結へさせて
有りなりし二六寸のひんしのそくあれて

階は一間ありみやれは二間ありわたれ
次びんしのよしらのうちなほつとて
後あり
有しかつきの風かなり
きめのうさみれこなは双紙のやうしもや
うなかせや
さいの南おりくりしつ殿へはなれて
東対の南の面さしのつゝきさきの
うるせとこのもちて
わうく

御座（ミザ）や
いとやごとなき御ありさまの
紫上之
宰相のきみ
右近の将や
いろあひの葉に来つるにも常の桜をよそにて散るをしらぬ
桜は女三宮なりとぞいふめり
にれそら紅葉かりに
上の詞は大将ハんとりよあやにくなりけるみを
のたまひけ思ひつゝ事やあらん紫宸門

将の思惑なれしはあとは推（スイ）量ぞかりち
かゝる文とぞみえて
深山木に秋つきぬ山路に思ひ（ガイ）はての花の色なりけるに
むかしのまゝに本歌の御詞をよく思ひあはせて
八雲（ヤクモ）抄の注るは定家（テイカ）卿にも不知とかつて
しきなかとにいふ紫式（シキ）部がかゝることを
あらはし花の時なりとも
しき葉深山（ミヤマ）木なりけるとぞいへるにことなる
就て深山木は紫上なりとよめる花の色に女
之文をいふ也し

此中へよりてハいはく
頭痛(づつう)又苦痛(くつう)也

小侍従か許
かれハ名をも句也

みかきの原
うしや薬の女三宮の御事なり をもと
也

是いふく
侍従返事をとくへ
又人をもわらぬやいかなり

侍従ハみをのみいとひつゝみ給ふ事と志て
くるしきてうさし

若菜下

花鳥餘情第廿

若菜下

以詞為巻名くはしき事は上巻にしるし
侍りは六条院四十一歳二月の事よりて
は上巻にあり同としの三月より[illegible]
所みえたり四十二より四十五までの
事は拠ころなり所見なし四十六七
歳の事は又乃数行り中にて四十八年
のうすけるは此巻の詞にもたかはしく
くはしく勘とへきなりくらら数

御門に従ひつゝ治給ふ十八年なりしか
さ給ひとも利冷泉院は源氏平六
歳の時御位をゆつらせ給ひけり
て料簡(レウケン)あるへきにや
正しき人も古への例をもとめ給はれ
しかるに右衛門督(エモンノカミ)女三宮を思ひけるに
まつ例の小侍従かりへ文つかはしけれは
返事なし
まへにも文に山桜とよみ捨へける歌と
いひ後遣は宗としてなりとおもへと

さてしもこの御はまれ給ひて思ふにとや
上奏の末の詞なり御前にてみわかしみな
上東門院ゆかりのものを止て
殿上の管弦をも止められ給ふ御事とも
是御管弦なれは御まつりに行はるゝ人く
おはしけり
殿上の管弦の例(レイ)もありきと故(コフデ)
壷(ツボ)の后(キサキ)の御忌(キ)月なりとて停止(チヤウジ)を
らせ給ふとぞ忌(キ)月の為に唐寺(テラ)より
申されし也 晋穆帝(シノボクテイ)后(キサキ)を納むとし

てん九日これ忌月といふことありし
を礼記よ忌日の詞ありて忌月の文
なし忌月あらハ忌歳あるへしといふ
例あり又唐武后の時契丹を平らく
軍をとゝめし時凱旋の楽をならさんとす
しにこれも高帝の忌月なりといふに従
はしを晋穆帝の例をもては
升平の軍楽をおこすことをえさり
本朝にハ代忌月とよふ事なか
りしか九月九日の宴も延喜帝の御

忌月なれハとりやめて十月なりしに
此後ハ残菊宴とかハりし後に
又後江相公其文をつくれり文粋に
みえたり
こゆゑの詩しかとからのゆゑのもとにしかる
上にしるしき
李部王記承平三年三月十六日殿上納
臣於朱雀院歩射　又天暦四年十月
十五日試春宮擬帯刀坊亮以下取試
先試騎射次試歩射云々

と猫のことのけちかくいとむつましくなりけりや

このわたりはおほかたを憐え

うちの御猫こそわきてひさつまいりけるとか

うとまれ

小右記長保元年九月十九日日者

内裏御猫産子女院左大臣右大臣有

産養事有衝重垸飯納筥之衣等之

猫乳母ハ馬命婦時人咲之奇怪事之

天下以目若是可有徴歟未聞禽獣用

人礼嗟乎

いにしへのみしひともとめてのくみつきをすり

清少納言猫をかくしみ人といへる人は

しおりのかなさこの松をもとめる人とも

そりいふんや其情のものをや

きこく猫かしといへらるけりなけれ

猫字の音めてや猫をは太善匝やし

ねうしとなくさうなくもちゐむかし

といへり

されも世しのちまりまやと

唐武宗時宮妃後為猫事有刑

ゑもうせ給りきうこさこのことを
前斎院とやん心
ぬしほとゝきなれてうちの御門御位すりは
あせ給ふ十八年まなさせ給ひ
冷泉院ハ源氏廿八の時受禅ありて廿何
くわらしと在位のとしかはりて源氏四十
六条まてハ十八年なりあつかはなり十八
年在位清和天皇の例也
おほきおとゝちの御ふてもかりく
太政大臣致仕の例ハなけれともた

右の大臣致仕したまへくなり　但天暦
三年正月三日是日太政大臣致仕表
従中務省進有勅答不許　云々
見李部王記
かはりある御くらゐを奉るまじきとおもひし
みこのゆらして
今上乃母女御贈后の事をいふ
おりゐ給ひの冷泉院
帝王系図云弘仁十四年四月十一日遷于冷
泉院十七日譲位於皇太子天暦八年

三月十一日改冷然院為冷泉院

六条院ハおりゐ給ふ冷泉院の御ゆづりなれバ
しかるをおなじ御なかのうちなり されバ
あれしとるかれと思ふなやましき御事
なりて

冷泉院ハ実ハ六条院の御子なれど系
図にハ桐壺の御門の御子にしるされける
此段おもしろしといへるや陽成天皇の
御母二条后ハ業平中将とまことありける
よしいへバ清和の御子といへど也しとぞ

業平のことをいひあらはしたるなるを
てらかの一代りうめく末の代りとて冷
泉院も作りて冷泉院の御事とはしかりしか
たるへく思へし

源氏のうつくしき給ひける御子の御事を
薄雲女院 先帝御女 桐壺后　秋好中宮 前坊御女 冷泉院后
明石姫君 源氏御女 今上后
かぐやこといひおもふす雲林ゐハまうしき
まつ源氏ましまして源氏のうけまゐらせ皇女をいみ
あ源氏のうへとうなり藤氏の后なし

あはさりゆへに
むかしの御事ハ御門もけんと申て
女三宮御事に
住吉乃御願ふかくましましけるによつて東宮
の女御の御祈りましまして給ひけるにて
長保元年九月十九日御堂関白于時左大臣
随身室家参石清水并住吉給東遊
神楽等有之
今案源氏君相具垂上参詣住吉了
准や

ほの参りて三をしうりうりありまして御川
志けりむかしのよのおこなひ今やかわりきん
交野大領彌益女高藤公密通生女子為
兼香殿女御生延喜帝
さらほむひの御さえらしゐるしほとそこう乃
御かくれんとも
密通事奏有りわおぼしまして共
事なれ利
舞人たちのけとも少うちきらけ有
うき事なちむかしき

舞人は十人石清水賀茂の臨時祭なと
おほし六衛府のすけともや陪従をそ
舞人は十二人四位五位六位各四人にて
さまも道々のものとも人かせ給はよしみん
えらひくりつるかふてりて加陪従
とてつかれしも楽人の尉なとものなり
春日祭を楽使の時舞人陪従はみな
近衛の官人也臨時祭試楽調楽なとそ
楽準まくられしを行ふゆへ陪従そる
むかしハ楽人ハなりしや

御かくらにてはおもしろくけうありけり
内神楽にもみなを楽人にて
おひへのものとものふて
古今長歌なとのさてもやおなかれん
思やうなる世中を待つへくたにいと
東宮の御位よりいはゝん世をとこそ
十月なかの十日なれは
一月卅日を上中下十日つゝをそふ
其ハ廿日ハ中の十日やこのゆへなり
ハ廿日の月とこそ

ふとりうちゆくおくに拍子も此人をたて
ある様く
とい和琴之太鼓なとをもちぬるをはす
こゑなるへしといふ也

山あひすりといふ竹のふし
賀茂臨時祭舞人竹文青摺袍蒲萄
染下襲地摺袴合袴陪従襖桐文青
摺袍柳色下襲白表袴合大口赤紙半
臂緒川常ホ各閑付之く

かさしの花のかうしは
臨時祭挿頭使ハ藤舞人ハ桜陪従ハ山吹
但住吉詣りハ使舞人陪従のかさし
ハ藤の上と右とそ行やも　諸社行幸
乃時東拍子ハ使もかさし

もとめ子をは石をたてり宮の前りうんを
ちからこゑおくりのふしもなくて終
きこえのそぬりをもちさしおもひうたふ
神はりそつ所ゆこゑつしうた
くれの名ゆのふれわこ地人毎なくうたし
くまてうた

東遊譜云先一二歌次駿河舞次求子
次加太於呂之調子高麗双調之
長保五年住吉詣於御社御前以下
上達部其外殿上人合十人舞於神
主立舞相府脱衣被之
今案これを片舞といふ事は神社行
幸なとの御遊の時は求子を舞て後
公卿以下十人それぞれに舞のおは
りに舞しとてかすかなられ
ありとそいふ也又は公卿以下襲衣去

冬されの殿上人のあそひさまもふ
なれられし井のわこめたましし
今河とに紅葉の夕りて刑あらしく
みる観之
いとうつくしきなとをやつれりさし
あら一ろりまいく人めり
萩さかさす事は人長の作法といふ人
もは神ありおれ東楽のつきしの
事なりといふなるし
住吉の松の秋風の霜は神のけさうゆふかつら

まつせのわたりの山さへとりひけは雪の
おしく思ひ給ひてまつりたるかけたまふ志
なしやとみえるなりしくれん
清輔朝臣袋草子　文時云
こゝろさしは神のりをもひら風にかける雪
今案は文時云ひらの山によるゝ坂
里とふは雪を詠むるなるとたかく
侍進りもしてひらの山の中ゆ川ら
をん事は相信なりし文時を篁と
かけるはさんたへとそあやしけるか

かゆへは関吹こゆるも海のよ風の奇を
壬生の忠見か集に侍るを行平中納言
のうたなりと此物語りのとかわれしを
續古今には源氏なりしとも行平とかけらか
川平のうたと入ておもしろかる忠見か
うこふく侍りあまりのなかも侍れは文時
を篁とのあやまりも出ちくなる事たとい
すみかくに紀へのうへりしも漢家本
朝女ものあらすら文なりしいは
源氏物語りあるりつるゝる在称

あれも篁(タカムラ)が古なるを文時とおやもれ家
みやうきはんいかりとあんしの説を
ありとして閑ふさこゆかと海のうへ風の
例をむつさも
このひとさなり為かゝかくりかりく
神楽(カグラ)面(ヲモテ)は神楽なる人の面也
入道の御門は御かこういをつゝしくまゝく
朱雀院(シユシヤクイン)の御変也
二品なりける御娘宮とまゐる
禄令(ロクリヤウ) 一品(ホン)親(シン)王封(フウ)六百戸(コ) 位田(イデン)八十町
二品(ホン)三品(ホン)封(フウ)百五十戸 位田 二品六十町 三品五十町
内(ナイ)親(シン)王封減半(ワウノフウハゲンスナカハヲ) 位田(イデン)減(ゲンス)三分之一
今案二品(ホン)内親王ハ封二十五戸位田四十町也
河海ありハくわりをりんへあるされたりと
此事をいとくわしくときあかさん御しむと
そのやうなり
女一の宮すへ
そのむしさめるさ代との人なるそ
樂書(ガクシヨ)日師(シ)文之(ブンガ)變易(ヘンヤク)寒暑(カンシヨ)孫(ソン)登之感(カン)動(ドウス)
風雷(フウライ)ふとし調(イタシ)琴事(キンノコト)也琴(キン)書(シヨ)日師(シ)曠(クワウ)晋之(シンノ)

樂宮也上於琴徽易寒暑白風雨爲
晋平公鼓之感玄鶴六下年

やうこれかゝる人前てのうきわれ
風しらしはへや
西月廿日いつりあれし
洲は十九日とりまちのはちにみちる
はたは御つきちらて御さいしかれまり
朱雀院の御年御葉乃事し
あむてんなつしてもつり給
女の文の内之

ちうそ今こちとくれしかる人
されはむかしさむの上乃童女の子やあ
文はうちれとくれしか井のうちあそひと
へと申すりや
女御乃内ともりも
あし文はうちきこえ
あしの御方のいとをしうて
こうちいさくはうちき西の御し
とい風し
文の御方はとくれい行つくまう給く

あをまいうら絵へ青丹を濃まあり黄
とりしろえ
いちころてうよろしめしなたて
撥の緒ハ初緒といふところ調子の急れ
歌といふハ一越調ハ一の緒とちと
いふへきやうなとそうめなし
柳のうすものゝ柳かけなりひきかなく
柳の衣りうと柳の裳といふ御へ尹
たりや
五月まり花ちちられ花ちちと

五月待花橘の香をけハ昔の人の袖の香そする
柳の糸へられ柳といしとをり律とそ川
されれ柳り志てうハ
律ハ律呂といふ律ハ陽正之呂ハ陰助也
然とも催馬楽ハ呂律といひく律と
次りしもの
てんちとるひしかも神のやわらけ
樂書云琴動天地感鬼神
此くうひさつくゆくしめ川ら
婆羅門傳正始渡本朝之但允恭天

皇文武天皇(モンムテンワウ)も弾琴(ダンキン)給ふと
きんハこの代の始
うけ給ハり三すゝ君都風(ミヤコカゼ)といふ琴なと
りの志しきへてのかくぬといふて
なおりもしわらハ
院をゆつり給ハ
東乃對(タイ)紫の上の事にて
う無いこもりて更に御地語なくきこえ給ハく
紫の上ハ女三の宮の御ことよりともわ
給ふ暁(アカツキ)まての夢のまゝ

おもしろへ御さかへ給ひけれハ
他事(タコト)なれハ
すゑまての心をおもひをかへたる思し召候
これハ紫の上の事也
おほきこゆ事なり
大将かくの事也
君とそいさすかに海なさけハわかれ
君ハむかしさきのうつりむらさきのた
もの顔し
御乃ゆかりこかくされまてせられけと

二重ハ源氏乃御事也

此宮の御方ハ二の宮とみん

かしら木乃蜜藤葉宮といふ也

あかり乃こし衣ハおもしろくかく

あかきくくハ女三宮乃御柳きと東宮乃

御くら衣ハ御おもれハあまりとみくおかれそ

せくいわりハ花なくいろいろ乃まふと

いらん女かなれ

此の人へいりくわもさぬるもしく

此院ハ朱雀（シユシヤク）院と申也

いとこし此御つくりあつましかも院い

爲し

しる木の宮ハ源か柳んこなりしも中

あるハ女三宮を御中しとおもへか利

しる人ありしく思ふなり

此緣のをこし地なしく御うつ乃以緣も

ふくらう結へ丸

かしら木の米門院中納言なりし御女

中納言ハ三位の御娘し三位乃袍文（ウヘノキヌ）

浅黄（アサ）をいふなり

よその思ひやりいみじくあはれなく
かしこき御心ばへある事にて
此ほどもしき禄にはいとらうたき家なりけり
あはれ
あるとし猫をかひおきまゐらせんと
思ひとみてしい家なりしかなはれ
つかうまつる事にあはれなりくまゐり
法皇と申すは六条院の御こと
を思ひて後悔もなく事のみなし
なり

おほそれ御心をもてあそぶ晴よ此家のうへ御神なれ
此ついでにはをいとりなきがらをのへ
宮のうちをもやむなくみなつきて
祈りつかうまつりしきんちして
宣なそうりしきんて
うきりなきさとんなときこゆれと
二条又条后なとの歎き
をはこ経をのしめをとも見ありしく後しく
まひしきかのとものまつりしく
大般若御読経焼損非気足之由稲荷

明神告貞宗法師給事見延長八年

李部王記

斎宮りハおろしまし志ての御ほとゝろかへきん

くさ乃事ともをせさせ給へ

斎宮寮忌詞内七言

佛タチスクミ　經ソメカミ　塔アララキ　寺コリタケ　香炬

僧カミナカ　尼ツラハス　斎カタカミ

いさきのいとなみをもろしりぬまいらせぬもの

事ありけり

夕暮のうへ

かんの君ハむかしのまへくらゐおわりのちらう

らうあすい

衆門侍之牢籠ハちかよハあわささいのと

よ色のかハわりとゝしてこれハ風のかくしをあ

里それとく御おもてをさき給ひく

風のとく椅子をいふやうなれを

紗てかハわりともとめ給ふて

思ていとけなき御ありさまとあり人

有もみてさせ給ひれハ

みとの御のまの事なと

ちくさの御んやとい給らんと
御門の御ん画給らんこと
院もきこしめしけるをいふ事ありしかさんと
院ハ朱雀院の御事也
かゝる事なんわかれしとつきてかれい
侍人の文を源氏のみ給ふまし
身を思ひかりして
身をいひゆかんて
うきふまうれぬ思ひしさの
思ひさのうき恨まことなさハ文ならひ思ひとみまや

ゆかりより後の言也さて御説言也
右の都らのかのさかれとりくくゆかうし給
ことなつて
此下の一段ハ藤ころのかけくろ乃ためよ
あひらうし時の事也
二条乃内侍のかんの君とハ
二条よりハ朧月夜の事後御かんよゑ
乃を女ニ交すゝ後弁所ゟ帰かいの
事ハなかしのかん乃君乃阿さよなるを
多る事也

ゆくおほはさらし事なれと
内侍上乃素懐をとけたる事彼乃御
事なり思ひ給ふなるへし
あらし夫乃よの内しるしなとを

紫上の詞も

けさなとはいふぬ世の声
ひとの居乃くろけさのぬいは作り侍る
作り給ひなん
うちまかせたるやうに日数なりもしへ夫れは
らひなとにも

まやひといふ羽伊勢物語ありこの物
語りはあまりなれともわり月華記あは風谷と
のきなりまやひりたとやきらかなるころ
又人と仮粧とらんなりともかくいふ羽え
うちまかせのまやひとのみするも見や
作ひ人りんとういるやつるへきの
羽はんとありてみなへ夫え
はくとしくちなるうちかしらへ表
わさもし夫事とい
これなとは源氏の物語へ

いろもしあくたる命のきてしあけすりけり

うら命のきてこえあすすりけりおひけれ

お乃かか事ときいろてさろかりけりあは

しかすとなり

ゆくとも紀わろわりさ給

さることすさしみかつとんとしまろけるかつ事

とりうて

院のおうしまさんにこ能さいあ我んとさらく

院のおうしまさんかこさりい陸ゆおさてれ

まうりゆしまさう人事く我かしあつ侍

無しき命をめしおきりゆくとかんのへ給

さうやうありと思ひとき

ゆくへつかりれいふつ弗みちありも登とりうす

うろへ弗女のこり

れいふつさみちハゆんの事く無くりうす

こ女ゝとと無このとゐすやいふまりし

うおそさり我んのおく佛ろうらし

身ゆくのゆんかりいあまりいうりあなりゆよふ

絶弗ありいあり給と

これハ山の御門のゆゑすと

みだりかくびやう
しはぶきハ瘧病脚病の兩儀あり
みだりハもろくの病のうちに血氣かみだ
れて病となるゆへなりしかしも
ふるきけつりを仰りしとといふも脚
氣の事をもさしけり
世人ハおもくみだりかさをさいふとくしても
のせ給ふなりけるをもちいなんおもひ
ありき侍
女三宮の御賀にこそきこえさせ給ふも

ともなき風なりかしも東の中將ハいふ
とてやとんえのかや
御賀乃日ハあやしきけしきを有しとひとかた
のもてこうさう給ハ
承平七年陽成院七十賀舞童大人
服赤白橡袍蒲陶染下襲
人よりわきたりもてけるかや
此の暑ハ婦みののて
榮花物語收理病惱の事をのりた
ちからなく一ときもうしかいてハゆめにもそ

めでとおり
まいらせける御しを経又段わたらしことを
あまりを段かしうさあの
天慶二年十二月貞信公六十賀太政大臣
おこ六十ちの御諷誦
永延二年三月十四日法興院大入道六十
賀公家今日御諷誦おこ六十ち、
今業御賀よ法性寺の諷誦ハ年齢の
数と用かに定る事之二十ち賀おつまとて
め十ちかく御しを経わるやはあるまじ

寺ハ仁和寺の円堂か年番金剛界大日如
来とりて二十年寺の内を経別当そ又
仁和寺の円堂にて摩訶毘盧舎那の
御誦経わりとて七巻の結縁のとい寺
物を段ありしも二千年ちるうち陀ひろさ那
の御しを経わりといふ是とくうきさる
ありゆしの筆法蔵よおるとの書よね似
しるや